

[001] 九大國文學表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10574>

出版情報：九大國文學. 1, 1931-09-01. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

紹介と批評

放送講演集 九州方言講座

昭和五年十月より六年三月に亘る間に九州に於て放送された方言に關する講演を集めたものである。最初に吉町先生の『九州方言の輪廓』を掲げ、續いて九州七縣の方言に就いて一縣一氏の七講演を載せ、最後に春日先生の『九州方言講座の後に』を以て結びとしてゐる。

吉町先生の論述に依つて先づ日本語の二つの分裂發展期とそれに應じて次第に定まつて來る九州方言の地位及びその資料の歴史的概観が與へられ、更に九州方言の區劃及び現在の研究狀態が明かにされてゐる。七縣の方言に關する七氏の論は夫夫獨特の方法を用ひてゐる。而して福岡、長崎、鹿児島、三縣以外はすべて縣内に於ける方言區劃を細かに示してをり、又佐賀、長崎

宮崎、鹿児島、四縣の部には各々その方言對話を掲げて郷土の情趣を表現しようと努めてゐる。かくして各縣の特殊な語彙とその分布とが詳細に擧げられてゐるのであるが、必ずしもそのすべてが各縣獨特の方言でないことは全體を通讀すれば自ら明かであり、然しそれによつて九州方言の一般の特色が示される結果となつてゐる。

熊本縣の田中氏がアリマツセンをアリマセンの音の増加であるとし、福岡縣の安田氏が同じ現象を音の促音化であるとしてゐられるのは、何れも誤りであらう。これは九州方言の著しき特色であるが、その意義は、敬語助動詞マスの歴史的的研究によつて春日先生の明かにされた所で、それを『九州方言講座の後に』に於て述べてゐられる。即ち、マスの發達史は、マキラスル→マラスル→マツスル→マスである。而して九州にもマスのみを用ひ、音を促めぬい豊日地方があり、未だマツスルを用ひる肥筑地方がある。更に別系統のモスを用ひ

る薩隅地方があり、さながら九州方言區劃の三地方を形成する一事因となつてゐる。而してそれは又このマスに關する限り三地方の方言の時代的相異をも意味してゐるのである。大要かくの如き先生の講演を以てこの書は終るのであるが、猶その後の調査により、先生は九州の一部に今もマラスルの殘存せる事實を發見されたことを附記して置く。(熊本市花畑町、日本放送協會九州支部發行。一二二頁、定價貳拾五錢)

つれく種 正徹本

垣内松三氏編古典叢刊の第一編にして、川瀨一馬氏の校訂である。巻頭に七葉の玻璃版と氏の解説を、巻尾に、假名文字遣一覽と徒然草研究參考書目とを附してゐる。本文は靜嘉堂文庫所藏のもので、それに流布本の代表として宮内省圖書寮所藏の烏丸光廣與書古活字本の相異を頭註として載せてゐる。(東京、文學社發行、壹圓貳拾錢)